発表要旨

ハドリアヌス帝の庭園について

野中　夏実

ローマ近郊のティヴォリに残るハドリアヌス帝のヴィラは、ローマ時代の庭園建築を今日に伝える貴重な遺構の一つである。この発表では、このヴィラの庭園に見られるギリシア文化の影響について、簡単な考察を試みる。

ハドリアヌス帝（76-138、在位 117-138）の治世は、国境政策、行政組織や法制度の改革、軍隊の再整備、また奴隷の地位の向上を図ったことなどによって特徴づけられるが、文化面から見ると、彼がギリシア文化の非常な愛好家であったことが重要である。彼は、在位期間の約半分を属州査察旅行に充てているが、アテナイは特に好んだ都市の一つで、125 年、128 年、131 年の少なくとも三回にわたって滞在している。112 年からアテナイのアルコンに就任し、図書館、柱廊、体育場を建設し、オリュンピアのゼウス神殿を完成している。先帝トラヤヌスとは対照的な、内向的性格の持主で、幅広い教養とギリシア文化への並々ならぬ関心を持ち合わせていたことは、伝記作家によって伝えられている。

即位と同時に施工が始められたティヴォリのヴィラの工事は、没年までつづけられた。晩年はそこで過ごすことが多かったといわれるこのヴィラは、旅行の記念に、かつて目にした建築やモニュメントを再現したものであると考えられてきたが、むしろ個人的な趣味による建築や彫刻やモザイクの豊富なコレクションである。サルツァによるヴィラの全体図を見ればわかる通り、広大な敷地内に数々の建築群が散在しているが、その中で主な庭園区域として挙げられるのは、ポイキレ、スタディウム庭園、図書館の中庭、宮殿、黄金の広場、カノプスである。このうち、カノプスの区域について、もう少し詳しく見てみることにする。

カノプスというのは、エジプトのアレクサンドリア近郊の都市の名前で、そこはセラピス神殿があることで有名だった。ヴィラの一区域がこの名称をもつ

ようになったのは、「ハドリアヌス伝」の一節からである。カノプスの区域は、以前そう考えられていたような、セラピス信仰に関りのある場所ではなく、趣向を凝らした夏のトリクリニウム(本来は食事のための部屋の意)である。そこでは動水と静水を巧みに組み合わせた華麗な水のスペクタクルが繰り広げられ、水辺の彫像が水面に影を映じている。この区域で発見された彫刻35点のうち、ギリシアに関連のあるものは14点で、エジプト関連8点、ローマ関連3点、その他の断片10点を大きく上回っている。その中には、アテナイのアクロポリスのエレクテイオンのカリアティド、及びエフェソスのアルテミス神殿のアマゾン像の忠実なコピーが含まれている。

カノプスの庭園における水と彫刻の用法からうかがわれるのは、ギリシア文化ではつねに何か聖なる意味を帯びていた水や彫刻が、ここでは庭園装飾として、庭を華やかに演出する小道具の一つとして用いられているということである。つまりギリシア文化そのものではなく、ギリシア文化をローマ人の観点から取り入れた、ローマ独自の文化が創られているのである。ギリシアの政治的な征服者であるローマが、文化的には被征服者であるという逆説は、ある程度までは真実をついているにちがいないが、文化の受容の問題はつねにより複雑な様相を帯びているものであろう。